

## 75

## 木内政章（原南陽・小野蘭山門人）の事蹟と学績

町 泉寿郎

二松学舎大学東アジア学術総合研究所

木内政章は、原南陽と小野蘭山に学んだ医者・本草家で、既に谷伴夫、岩間實、平野恵の他、『三百藩家臣人名事典』『水戸市史（二）』『常陸太田市史 通史編 上巻』『日本博物誌年表』『水戸藩医学史』等に言及があり、一定の知名度を持つ。今回、筆者はカリフォルニア大学サンフランシスコ校（以下、UCSF）図書館において、未報告の木内政章旧蔵書（含自筆稿本・自筆写本）を多数見いだしたので、木内政章の事蹟・学績を報告する。

### 1. 木内政章（1769～1833、通称は玄節、字は伯斐、別号は桂園）の家系

出身地である常陸太田市の小目共有墓地に政章以前の墓石、水戸市酒門町の酒門共有墓地に政章以後の墓石が残る。家祖木内八右衛門は、天正中、上杉氏や北条氏政らに仕えて武功をあげ、その長子八右衛門は寛永中に徳川頼房に仕え、次子道悦以降は小目村に移住し医を業とし、その後、道悦清信一春伯政道一男春伯政芳（1743～1804）と医業継承。政芳の長男が政章、次男が玄民政世（？～1820）である。政章は父の跡を継ぎ御目見格郷医（1806）、尋いで藩御医師格並・五人扶持を拝し水戸移住（1822）。天保4年（1833）6月15日、65歳で没。政章の男秀齋政典（1814～39）は小宮山楓軒・多紀元堅に学んだが早世。弟政世の男以忠を養子とし、三代吉（？～1923）一克（1892～1977、彫刻家）と存続した。

### 2. 木内政章の学的系譜

政章は16歳（1784）で経世家として知られる従兄弟高野昌碩（1760～1802）の紹介により原南陽（1753～1820、山脇東門・賀川玄悦・皆川淇園門）に入門（『原南陽門人帳』）。寛政頃からは師南陽や昌碩が京都遊学中に伝写した写本等を借り古方系の方書・方論や佚存漢籍医書を筆写した。流布本による筆写後に善本による校訂を行ったり——荻野元凱本『是齋百一選方』（元版）、多紀家本『魏氏家蔵方』（宋版）など——、また南陽が多紀元簡に『万安方』の借覧を請うた際、本田恭とともに派遣されて筆写していることから、文献伝写に関する政章の高い意欲と能力が分かる。29歳（1797）で京都遊学、4月に小野蘭山（問之町通竹屋町上ル）に入門、5月6日に荻野元凱に入門した（「荻野元凱門下姓名録」）。着京の月から近畿各地に採葉を開始し、滞京中は蘭山の『本草綱目』講義を聞き、また写本に励み、翌年4月に帰郷。蝦夷地探検で知られる木村謙次（1752～1811、吉益東洞門）とも交流があり、師南陽とともに水戸藩学の中では立原翠軒や小宮山楓軒ら実務派官吏に近かった（藤田幽谷一派とは遠い）。

### 3. 木内政章の遺著・学績

帰郷後、小野蘭山の講義をまとめた『本草綱目記聞』52巻を編纂（1798～1800、杏雨書屋・UCSF所蔵）。家伝の処方集『奇方録』（京大富士川文庫）を水戸藩に提出し（1805）、文政4年（1821）頃までに『常陸物産誌』24巻（彰考館・UCSF・国会図書館所蔵）をほぼ脱稿。文政10年（1827）、西遊中採葉した腊葉の亡佚を惜しみ、画家にその形状を写させて『草木形状録』10巻（彰考館・UCSF所蔵）を脱稿。ほかに『木内氏石品目録』『日本諸州奇石産処録』（北里大学医史学研究部）がある。UCSF図書館所蔵の木内旧蔵医書は89点。一部を除き1964年7月8日に一括して大屋書房から購入され、1965年5月1日に同館受け入れ。一部に高野昌碩の自筆や旧蔵の医書を含む。

木内政章は、比較的短期であった小野蘭山従学期間を挟んで、長く原南陽に師事し、多紀氏らの影響もあって博く日中の本草書・古方書を修めた。『本草綱目記聞』は、単なる蘭山の講義の筆記ではなく、政章自身の文献博搜と実地踏査を踏まえた高度な内容である。『常陸物産誌』に結実する物産学は、水戸藩実務派官吏による藩政改革の一環として、位置づけられるべきものであろう。木内政章の学問は、小野蘭山系統の本草学として位置づけられるだけでなく、18世紀末から19世紀初の折衷医学から考証医学への展開時期の医学史料として恰好の事例である。

（本発表は、文科省科研費助成・基盤研究（B）「米国立医学図書館等の所蔵の日本古医書の調査・目録・データベースの作成」（研究代表者：酒井シヅ、課題番号19406017）による研究成果の一部である。）